vivo

水戸芸術館音楽紙［ヴィーヴォ］Vol.266

11-12

November & December 2024



©Laura Stevens

©Tom Miller

特集 02

新ダヴィッド同盟
スティーヴン・イッサーリスを迎えて

04 樫本大進＆ラファウ・ブレハッチ
06 クリスマス・プレゼント・コンサート2024
08 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

今年の「新ダヴィッド同盟」に寄せて
～スティーヴン・イッサーリス氏とPrussia Cove～

庄司紗矢香

スティーヴン・イッサーリス氏とは2001年のヴェルビエ音楽祭での共演で出会い、その後、氏が芸術監督を務める英国Prussia Cove（プロシア・コーヴ）国際音楽家セミナーの秋のワークショップに招待いただき何度か共演しました（春にはマスタークラスも催しているようです）。大自然の中、皆が学生気分で食を共にしながら勉強会をする場所というイメージです。1週間のリハーサルがメインで、週末の演奏会は義務ではありません。

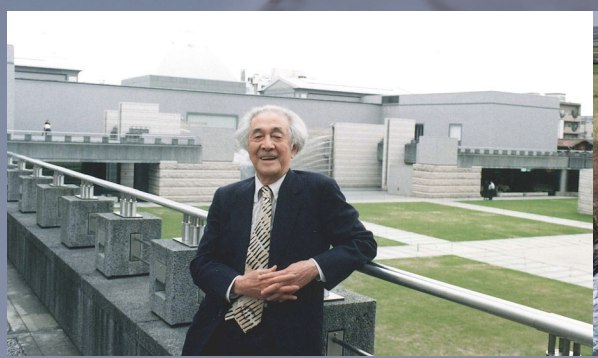
吉田秀和先生から、水戸芸術館で専属の室内楽グループを作りたいので仲間を集めて欲しいと頼まれた際、私はすぐにPrussia Coveを思いました。多くの音楽祭では集まった音楽家と1～2日のリハーサルで仕上げて本番ですが、室内楽を作り上げるには十分時間が必要です。

Prussia Coveは私にとってユートピアで、水戸芸術館の「新ダヴィッド同盟」はここから生まれたと言っても過言ではありません。

今年は磯村和英先生と小菅優さんに加えて、元・東京クヮルテットの池田菊衛氏、そしてスティーヴンが「新ダヴィッド同盟」にジョインしてくれる事が本当に楽しみです！



©Laura Stevens



吉田秀和水戸芸術館初代館長



イギリス南西端コーンウォールの海岸プロシア・コーヴ

イッサーリスと念願の共演
～庄司紗矢香から“ユートピア”への招待～

文：関根哲也


©Tom Miller

2010年に吉田秀和・水戸芸術館初代館長の命名により誕生した専属楽団「新ダヴィッド同盟」。11月に行われる第7回演奏会は、チェロの世界的スター奏者、スティーヴン・イッサーリスをスペシャル・ゲストに迎えて開催します。

イッサーリスは、1959年イギリス生まれ。10歳でチェロを始め、18歳の時には早くもロンドンでデビュー・リサイタルを開きました。その後、メンデルスゾーンの作品をテーマにしたシリーズ（1997年ザルツブルク音楽祭）、シューマンの音楽を掘り下げたシリーズ（1998年ロンドンのウィグモアホールなど）で国際的にも高い評価を得ました。

イッサーリスの取り組みで特徴的なのは、作曲家の生涯や作品の歴史的背景を徹底的に掘り下げ、そこから誰も思いつかなかったような新たな切り口を発見しようとする姿勢です。リサイタルのプログラムはもちろん、hyperionやBISといったレーベルからリリースされているCDにも、イッサーリスならではのコンセプチュアルな意図が明確に反映されています（例えば、フォーレやサン＝サーンスの作品を集めた『プルーストのサロン音楽』、ドビュッシーやウェーベルンの作品を集めた『戦時のチェロ』など）。また、シューマン没後150年の2006年には、日本で「シューマン・フェスティバル」をプロデュースし、鮮烈な印象を残しました。

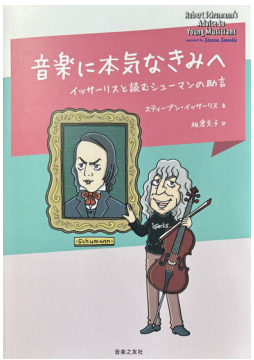
イッサーリスが弾く楽器は、1726年製のストラディヴァリウス「マルキ・ド・コルブロン」。その名器に、今日一般的に使用されるスチールやナイロンではなく、ガット弦を張っています。音量的な不利や耐久性の低さにもかかわらず、イッサーリスはガット弦でしか出せない音のしなやかさ、透明感を大切にしているのです。

演奏に対して厳しい姿勢と強いこだわりを見せるイッサーリスは、一方で若い世代への教育にも熱心に取り組んでいます。左ページの庄司紗矢香の寄稿でも触れられているプロシア・コーヴ国際音楽家セミナーなどでの後進の育成をはじめ、より若い子どもたちを対象にした執筆活動も行っています。『もし大作曲家と友だちになれたら…』（音楽之友社刊）は、教科書にも載っている偉人たちの人間味あふれるエピソードを綴った本で、大好評を受け、その後続編も執筆されました。2022年には、シューマンの『若い音楽家への助言』を21世紀に即したかたちで読み解いた『音楽に本気なきみへ イッサーリスと読むシューマンの助言』（音楽之友社刊）も出版されました。

このようなイッサーリスの音楽に関わる活動のすべてと、彼のあたたかな人間性は、世界中の多くの音楽仲間から尊敬されています。庄司紗矢香もイッサーリスを熱烈にリスペクトしている一人で、イッサーリスを「新ダヴィッド同盟」に招きたいというかねてからの彼女の願いが、今回ようやく叶います。

イッサーリスがプロシア・コーヴに庄司紗矢香を招いたのとは逆に、今回は庄司紗矢香が、思う存分室内楽のリハーサルが出来るユートピア的な場所、水戸芸術館にイッサーリスを招待することになります。

ベートーヴェンでは庄司紗矢香、磯村和英、イッサーリスが弦楽三重奏を、フォーレでは小菅優、庄司紗矢香、イッサーリスがピアノ三重奏を演奏。そして、2010年の第1回演奏会以来14年ぶりに取り上げるシューマンでは、元・東京クァルテットの池田菊衛もゲストとして加わり、至福のピアノ五重奏が奏でられます。



著書『音楽に本気なきみへ』

■公演情報
新ダヴィッド同盟
第7回演奏会

2024.11.30（土）14:30開場 15:00開演
全席指定　S席¥8,500 A席¥7,000
B席¥5,500
U-25（25歳以下・要身分証提示）¥2,500

●出演
スティーヴン・イッサーリス（チェロ／スペシャル・ゲスト）
庄司紗矢香（ヴァイオリン）
池田菊衛（ヴァイオリン／ゲスト）
磯村和英（ヴィオラ）
小菅 優（ピアノ）

●曲目
ベートーヴェン：弦楽三重奏曲 ハ短調 作品9の3
［庄司、磯村、イッサーリス］
フォーレ：ピアノ三重奏曲 ニ短調 作品120
［庄司、イッサーリス、小菅］
シューマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44
［庄司、池田、磯村、イッサーリス、小菅］

時代を堅実に生き抜く名手2人の初めてのデュオ
―樫本大進&ラファウ・ブレハッチ ―

文:青澤隆明(音楽評論)


©Keita Ogada/Ossa Mondo A&D)


©Marco Borggreve

驚いた、と言えば驚いたのだが、驚かされはしなかった、と言えば、それもまたそうなのである。というのが、ヴァイオリニストの樫本大進とピアニストのラファウ・ブレハッチがデュオを組んでリサイタルを行うと聞いたときの、私のごく正直な感想だった。彼らが本拠とするヨーロッパでもまだデュオでの共演は実現されておらず、この冬の日本でのリサイタル・ツアーで、水戸市民会館において叶えられると知ったときのことである。

それでも、いちばん驚かされたのは、ラファウ・ブレハッチの室内楽演奏が生で聴けることだろう。2019年になってキム・ボムソリとのデュオ・アルバムを初めての室内楽アルバムとしてリリースしてこの分野への関心が広く世界に示されたところである。ボムソリと言えば2010年の仙台国際コンクールで最年少の入賞者でそのときの演奏を私も聴いているが、あれから時を経て、ふたりはブレハッチがピアノ・ソロで得意としてきたドビュッシーやシマノフスキ、またフォーレのデュオ・ソナタに、ショパンの嬰ハ短調の遺作のノクターンをミルシテインの編曲版で共演している。だが、ソロ・リサイタルの機会もかなり絞り込んでいるブレハッチが、日本でソロやコンチェルト以外での表情をみせたことはなかったと思う。そこへきて、樫本大進という頼りがいのある確かなヴァイオリニストとデュオに臨むと聞けば、ふたりの堅実な音楽へアプローチにおいてはむしろしっくりとくるところもある。

いっぽう樫本大進と言えば、さまざまなピアニストとのデュオやさらに編成の大きな室内楽でもお馴染みだ。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1コンサートマスターとしての十数年の貢献を通じて多種多様なオーケストラ作品にも精通し、さらに懐の深さと表現の確かさをもってきたヴァイオリニストである。近くは2023年11月、ベルリン・フィルの新たなシェフ、キリル・ペトレンコとの初めての来日公演で、リヒャルト・シュトラウスの〈英雄の生涯〉でしっかりと輝かしいソロも聴かせたことも鮮やかに記憶に刻まれている。

樫本大進はそれ以前の2007年に縁もある赤穂、翌年には姫路で自らの音楽祭を始めて毎年交互に開催、2012年からは両市共同の「ル・ポン国際音楽祭 赤穂・姫路」として着実に回を重ね、東京公演も行ってきた。頼れる音楽監督はここでも名門オーケストラを介した交友の広がりも活かしつつ、当代きっての名手たちとともに室内楽を多彩に実らせている。

そう言えば、10年ほど前にもベートーヴェンのデュオ・ソナタ全集をコンスタンチン・リフシッツとレコーディングにもまとめていたし、ピアニストのエリック・ルサージュとはシューマン、フォーレ、ニーノ・ロータなどに続き、最近ではショーソンのコンセール、そしてヴィエルヌのピアノ五重奏曲という珍しい作品もレコーディングするなど、意欲的な活躍を続けている。

ヴァイオリンという楽器の性格もあり、また樫本大進という音楽家のパーソナリティーもあって、誰かとともに音楽することは、彼の音楽人生にずっと通底した響きなのだろう。音楽はもちろん、人間が好きでなければ、自身の国際音楽祭を監督し、名門オーケストラを牽引する重責など果たせるはずもない。そして、オーケストラをしばし離れて、より自由に自らの表現を打ち出しつつ、共演者との音楽をじっくりと創り上げていくのが室内楽、まさしくデュオの大きな喜びであるはずだ。

いっぽうで、ピアニストはもちろんコンチェルトの機会も多いとはいえ、たったひとりでも音楽に向き合えるというレパートリー上の特質をより大きくもっている。そもそもブレハッチが室内楽に最初に取り組んだのも2013年のことで、当時ベルリン・フィルの第1コンサートマスターを務めていた樫本の先輩格のダニエル・スタブラヴァが共演者だったということだ。世代も近く、ブレハッチは6歳ほど上の樫本と、言わばその胸を借りつつ、今回のデュオ・ツアーに出ることになる。

ブレハッチはもちろん2005年のショパン国際コンクールの優勝者として名高いが、その端正で品格のあるショパン演奏でも古典的な様式感が大きな

美質となっているように、モーツァルトやベートーヴェンなどウィーン古典派の諸作にもともと適性をもつ音楽家である。いっぽうで、自国ポーランドのシマノスキや、その同時代のドビュッシーの響きの世界にも豊かな色彩を実らせてきた。今回の樫本とのプログラムにもう少し寄せると、オルガンも手がけるブレハッチにとって、フランクはまた非常に身近な作曲家であるだろう。

さて、そうして世代も近い当代の名手が、初めてのリサイタルに編んだのは、モーツァルトから武満まで、かなり広範に年代や作風を旅するプログラムである。それぞれのもてる表現の可能性を幅広く引き出し合おうという意欲からだろうし、聴き手にとってもそれだけ多様な音楽を味わうことができるという面白さがある。大きくみれば、200年近くにわたるヨーロッパ音楽の変遷が、現代の名手の演奏で展望できるという好機にもなろう。それも、自己の個性を変に上塗りすることなく、作品の内実にしっかり向き合おうとする奏者どうしを通じてだ。

モーツァルトの〈ヴァイオリン・ソナタ〉K.296がハ長調をとるならば、次に組み合わせられるベートーヴェンの〈ヴァイオリン・ソナタ 第7番〉作品30の2はハ短調を主調とする。年代的には1778年3月から幕開け、これで19世紀をまたいだ頃合いになる。二重奏ソナタがまだ「ヴァイオリンつきのピアノ・ソナタ」であったところから、ヴァイオリンが存在感を強めていくさなかの創作だ。

ここまでが、マンハイムやウィーンで書かれた作品ならば、そこから一気に1世紀を飛んで、「フランスの音楽家」ドビュッシーが最晩年に書いた〈ヴァイオリン・ソナタ〉へとプログラムは進む。

同作は、第一次世界大戦のさなかに心身がぎりぎりの状態に置かれていたドビュッシーが、フランスの古典組曲に倣って書き進めていた6連作の第3作にして最後作となった。ストラヴィンスキー宛ての書簡に記したように「三段論法に類する努力を聴く耳に強制せず、我が国古来の形式を素晴らしく優雅に援用したもの」をドビュッシーは志向していたのである。

もうひとつの世界大戦が不幸にも起こり、戦後を独立独歩で歩み出した日本の作曲家、武満徹もまたドビュッシーの響きや知覚に惹かれていた。〈悲歌〉は1966年に書かれた30歳代の創作で、切り詰められ時間のなかに抒情的な音調を宿している。作曲者は「『自然』に対しての私の感謝の念を表している。自然が謙虚に、しかし無類の精進さでさししめすこの宇宙の仕組みにたいして、私の音楽はその不可知の秩序への限りない賛歌なのだ」と記した。

つまりここでは、ロマン派の芸術家たちが親しく感じ、暗喩としても好んで用いた自然ということを超えて、そこまでのヨーロッパ的な人間主観を離れた、新たな知覚で自然や宇宙を捉えようとする表現者の姿勢がみられる。現代を生きる樫本とブレハッチがどのように、それを見すえ、表現していくのかも、じつに興味深いところだ。

そして、武満作品をたずねて私たちの時代の近くまできたところで（と言っても、もう60年近く前のことにはなるが）、ドビュッシーから時代を巻き戻すように、フランクの名作として名高いイ長調の〈ヴァイオリン・ソナタ〉が演奏される。ベルギーからフランスに帰化したフランク60歳代半ば、1886年の円熟の作で、同郷の友人イザイに結婚祝いとして献呈された大曲である。

本作はマルセル・プルーストが『失われた時を求めて』のなかで描いた「ヴァントゥイユのソナタ」のモデルのひとつとしたことでも知られてきたが、考えてみれば、これらの作品が書かれた時は、すでに遠く失われてしまった世界でもある。先にも記したように、この後、世界は二度の大戦を経験し、現在もなお各地で悲惨な争いをくり返している。

そうしたなかで、私たちが人間というものと、他者への想像力の理解や信頼を確かめようとするとき、彼ら芸術の天才たちが遺した音楽はどれほど大切に感じられることだろう。あらゆることが変わっていても、私たちの感情や思念はそう遠くないところで、ただ過去を偲ぶのではなく、これからを力強く歩み出す心を感じるに違いない。

現実世界とは離れたところで、詩的な世界を私的に訪ねるのもまたかけがえのない体験だが、この日演奏される名作を書いたいずれの天才もまた、時代のなかで傷つきながら、それでも諦めずに生き抜いていたのである。現代を生きるふたりの真面目な青年の共演を聴くとき、意識せずとも、あるいは逆説的であっても、そのことはどこかで密かに鳴り響いているはずだ。

■公演情報

樫本大進（ヴァイオリン）＆
ラファウ・ブレハッチ（ピアノ）

2024.12.17（火）18:15開場 19:00開演
全席指定　S席￥9,000　A席￥6,000
B席￥4,000
『文化庁 劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業』
U-18（小学生以上18歳以下）￥0
保護者S席￥4,500
保護者A席￥3,000（枚数限定）
U-18および保護者席は、電話（029-231-8000）または水戸芸術館エントランスホール窓口のみでの受付となります。水戸芸術館WEBサイト及び、水戸市民会館（電話・WEB）・各種プレイガイドでの販売はございません。
※ご入金済のチケットの変更・取消は承っておりません。差額の返金は行えません。ご確認の上、ご購入をお願い致します。
会場：水戸市民会館 グロービスホール

●出演
樫本大進（ヴァイオリン）、
ラファウ・ブレハッチ（ピアノ）

●曲目
モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第17番
ハ長調 K.296
ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第7番
ハ短調 作品30の2
ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ ト短調
武満徹：悲歌
フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

クリスマス・プレゼント・コンサート2024

豪華アーティストが繰り広げる共演、協演、響宴！

文：角増 柊

水戸出身の作曲家・池辺晋一郎さんの企画・おはなしによる「クリスマス・プレゼント・コンサート」が今年も開催されます。ピアノ、合唱、ハーモニカ、歌と、彩り豊かな音楽でホールを満たすのは凄腕のアーティストたち。彼らが一堂に会する夢の公演を聴けるのは、12月21日（土）の水戸芸術館だけです！

今年、日本デビュー20周年 雲蒸龍変のピアニスト



福間洸太朗　©Shuga Chiba

トップバッターを務めるのは、20歳でクリーヴランド国際コンクール日本人初の優勝を果たし、ショパン賞も受賞した福間洸太朗さん。日本でのデビュー20周年という節目を迎えた今年、満を持して水戸芸術館に登場します。

最初の曲はグノー作曲〈アヴェ・マリア〉。J.S.バッハ作曲《平均律クラヴィーア曲集 第1巻》より〈前奏曲 第1番 ハ長調〉BWV 846を伴奏として、ラテン語による〈アヴェ・マリア〉を歌う声楽パートをグノーが付け加えた作品です。クリスマスの定番曲とも呼べる本作が、今回はワルター・フレミンクスの編曲版で披露されます。フレミンクスは声楽パートの出だし部分を、まるでテノールが朗々と歌っているかのように編曲しています。曲が進むにつれて、身体の中からじんわりと熱がこみ上げてくるような味わいにご注目ください。

続いては、今年生誕200年を迎えたスメタナが作曲したピアノ曲集《夢》より〈慰め〉です。チェコの作曲家スメタナといえば、1874年から1879年にかけて作曲された、故郷の風景を題材にした連作交響詩《わが祖国》より〈ヴルタヴァ〉（旧称：モルダウ）が有名ですが、わずか6歳でピアノのリサイタルを開けるほど、ピアニストとしての腕前も確かでした。一方で、スメタナは30代後半から徐々に聴力を失っていきました。聴力をほぼ失った1875年に作曲された本曲集は、〈失われた幸福〉〈慰め〉〈サロンにて〉〈ボヘミアにて〉〈城のそばで〉〈ボヘミア農民の祭〉の6曲からなります。今回演奏される〈慰め〉の原題「La consolation」は本来、人が悩みや苦しみに直面した際に、その痛みを和らげるための言葉や行動のことを指します。民謡調の素朴な旋律による穏やかな音楽からはじまり、何かを訴えかけてくるかのような鬼気迫る和音の連打による激しい部分を経て、再び平穏へと包まれていく軌跡が、まるでその一連の流れを描いているかのような美しい曲です。

ピアノ好き・クラシック好きには言わずと知れたショパン作曲の〈幻想ポロネーズ〉は、9月に発売されたばかりの福間洸太朗さんの日本デビュー20周年記念アルバム『ショパンの想い出』にも収録されています。こちらもぜひお聴き逃しなく。

みずみずしい女声合唱とともに Jazzyなミサでクリスマス！

これまで数々のコンクールでの受賞を果たしている女声合唱の名門・茨城県立水戸第二高等学校コーラス部。水戸で学ぶ高校生たちがみずみずしい歌声で最初にお届けするのは、ボブ・チルコット作曲《リトル・ジャズ・ミサ》のなかからの抜粋。「ミサ」と聞くと、キリスト教会で荘厳に響く合唱をまっさきにイメージするかもしれませんが、本作にそのステレオタイプは通用しません。その名のとおり、ジャズらしいスウィングやテンションコード（通常より複雑で、緊張感のある響きを持つ和音）が鳴り響いているところに、厳粛なラテン語によるミサの歌詞がノってくるのがユニークな作品です。



茨城県立水戸第二高等学校コーラス部

そのほか、校内の定期演奏会などへ向けて練習を重ねている曲も披露されるとか？ お楽しみに！

クロマティック・ハーモニカ その匠の技をとくとご堪能あれ



和谷泰扶
©Akira Muto

ハーモニカ演奏の第一線を走り続ける和谷泰扶（やすお）さんが最初に演奏するのは、本コンサートの企画・おはなしを担当する池辺晋一郎さんが、ハーモニカとピアノのために作曲した〈ちろそろ ちろそろ〉です。2023年12月21

日開催の「第29回『四人組とその仲間たち』コンサート」のために書かれた本作のタイトルは、大手拓次さんの「夜の時」という詩の一節からとられています。擬音の連続するこの詩について、池辺さんは「なぜかそれぞれの時の空気が漂う。不思議だ」と述べています。また、池辺さんがこの曲を脱稿したのは2023年9月7日ですが、くしくもこの日は、同じく大手さんの詩を好んだ作曲家・西村朗さんの命日となりました。翌日訃報に接した池辺さんは、本作を西村朗さんに捧げました。

ガーシュイン作曲の〈ラプソディ・イン・ブルー〉は、ラグタイム風のリズムやブルース音階が用いられたおなじみの曲です。TVドラマ「のだめカンタービレ」のエンディング曲としてご存知の方も多いのではないでしょうか。ガーシュインは本作をピアノデュオとして作曲しており、こんにちよく耳にするピアノとバンドによる演奏は、同じアメリカの作曲家・グローフェの編曲によるものです。ちなみに、グローフェ作曲の《ミシシッピー組曲》の一部は、「ニューヨークに行きたいかーっ!?」の名調子でおなじみのTV番組「アメリカ横断ウルトラクイズ」で使用されましたので、こちらもご存知の方が多いかもしれません。タイトルの“ブルー”は“ブルース”のブルー。そして、ブルースの代名詞といえばハーモニカ。ブルースらしさ全開のハーモニカによる演奏は、必聴です。

ブルースの次はタンゴです。アルゼンチン出身のタンゴ作曲家・ピアソラの代表作とも呼べる〈ブエノスアイレスの冬〉も、ハーモニカとの相性が抜群。タンゴの演奏に欠かせないバンドネオンと同じく、空気でリードが振動することで浮かび上がってくるハーモニカのノスタルジックな音色が、大人の雰囲気を醸し出します。

ソプラノ&テノールと深めるラグジュアリー・ナイト



今年のコンサートのラスト、澤畑恵美さんと高田正人さんによるデュエットのステージは、「さやかに星はきらめき」のタイトルでも知られる、アダン作曲によるクリスマスの定番曲〈オー・ホーリー・ナイト〉の演奏から幕を開け、歌曲やオペラ・アリアの名作が盛りだくさんです。

〈星の夜〉は、若かりし18歳のドビュッシーが作曲した歌曲。まるでギターやハープをつまびいているかのような軽やかなピアノに、星空を眺めながら昔の恋を思い出す詞を歌う甘いメロディーがふんわりと紡がれます。プッチーニ作曲のオペラ《トスカ》より〈星は光りぬ〉は、銃殺されることが決まった画家が、明け方の星に向かって、ヒロインとの愛を想って泣きながら歌う悲劇的なアリアです。どちらも夜空にまたたく星を題材とした名曲です。

ビゼー作曲のオペラ《カルメン》より〈ホセとミカエラの二重唱〉は、衛兵ホセとその幼馴染ミカエラによる二重唱です。タバコ工場で働く主人公・カルメンが登場した直後のシーンで歌われ、故郷に住むホセの母からの手紙をミカエラが届けることで、カルメンにすっかり魅了されそうになったホセが正気に戻っていきます。カルメンの妖艶な雰囲気とは対照的に、穏やかで美しいメロディーが印象的な1曲です。プッチーニ作曲のオペラ《ラ・ボエーム》より〈ムゼッタのワルツ〉は、クリスマス・イヴの雰囲気で賑わう街の広場にあるカフェが舞台の1曲。裕福そうな老紳士とお茶をするムゼッタが、偶然居合わせた元カレの画家マルチェッロの気を引こうとして歌う（振ったのはムゼッタのほうなのですが……）、華やかで甘いスローテンポのワルツ調のアリアです。

コンサートの最後を飾るのは、ソプラノ歌手のサラ・ブライトマンとテノール歌手のアンドレア・ボチェッリによるデュエットにより、ヨーロッパ全土で爆発的なヒットを誇った〈タイム・トゥ・セイ・グッバイ〉。タイトルどおり、歌でみなさまに旅立ちのごあいさつをします。

さらに終演後には、大平健介さんによるエントランスのパイプオルガンの演奏が、みなさまの帰路を彩ります。水戸芸術館のクリスマスを、最後までたっぷりお楽しみください！


大平健介
©Sandra Wolf

■公演情報

クリスマス・プレゼント・コンサート2024

2024.12.21（土）16:00
全席指定　一般￥3,500
U-25（25歳以下）￥1,500

●出演
池辺晋一郎（企画・おはなし）、福間洸太朗（ピアノ）、茨城県立水戸第二高等学校コーラス部（女声合唱）、三宅理恵（指揮）、田中直子（ピアノ）、和谷泰扶（クロマティック・ハーモニカ）、荒尾岳児（ピアノ）、澤畑恵美（ソプラノ）、高田正人（テノール）、河野紘子（ピアノ）、大平健介（パイプオルガン）

●曲目
ショパン：〈幻想ポロネーズ〉作品61
チルコット：〈リトル・ジャズ・ミサ〉より
池辺晋一郎：〈ちろ そろ ちろそろ〉
サルトリ：〈タイム・トゥ・セイ・グッバイ〉ほか

INFORMATION

※以下は7月1日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《10.26（土）追加発売》

■サイトウ・キネン・オーケストラ ブラス・アンサンブル
2.24（月・祝）14：00　会場：水戸市民会館グロービスホール

《11.30（土）発売予定》

■大西順子
2.1（土）時間未定

■兼氏規雄 クラリネット・リサイタル
2.11（火・祝）時間未定

■合唱セミナー2025 講師：相澤直人
3.2（日）10：00

■水戸室内管弦楽団メンバーによる公開レッスン
1.19（日）14:00
会場：高正U&Iセンターホール（鹿嶋勤労文化会館）

《12.21（土）発売予定》

■MCOセミナー・ウインズ2025
2.16（日）14:00

■ちょっとお昼にクラシック 前橋汀子＆荘村清志
3.8（土）13:30

■Duo la Bilancia（2台ピアノ）
3.9（日）時間未定

■小菅優「ソナタ・プロジェクト」Vol.3
3.20（水・祝）15:00

好評放送中!

Lucky FM 茨城放送
「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」
毎週日曜 7:30〜8:00
パーソナリティ：石井哲也アナウンサー
出演：音楽部門学芸員（月替わり）
学芸員がおすすめの曲をご紹介して、クラシックの魅力をお届けする番組です。



▼Lucky FM ウェブサイト
https://lucky-ibaraki.com/
▼radiko（ラジコ）でもお聴きいただけます
https://radiko.jp/

11月・12月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆Corodia 第2回定期演奏会
11.4（月・祝）14:30　料金［全席自由］一般¥2,000/学生（大学生以下）以下¥1,000

◆川又千世 ソプラノ・リサイタル
11.10（日）14:00　料金［全席自由］一般¥2,000

◆茨城の名手・名歌手たち 第32回演奏会
11.24（日）16:00　料金［全席自由］一般¥1,500

◆新ダヴィッド同盟 第7回演奏会
11.30（土）15:00
料金［全席指定］S席¥8,500/A席¥7,000/B席¥5,500/U-25（25歳以下）¥2,500

◆水戸の街に響け！300人の《第九》2024 入場無料
12.15（日）①12:00/②13:30〜　会場：広場 ※雨天時はコンサートホールATM

◆樫本大進（ヴァイオリン）＆ラファウ・ブレハッチ（ピアノ）
12.17（火）19:00　料金［全席指定］S席¥9,000/A席¥6,000/B席¥4,000
U-18（小学生以上18歳以下）¥0/保護者S席¥4,500/保護者A席¥3,000（枚数限定）
※詳しくは当館HPをご覧ください。
会場：水戸市民会館

◆クリスマス・プレゼント・コンサート2024
12.21（土）16:00　料金［全席指定］一般¥3,500/U-25（25歳以下）¥1,000

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート（入場無料／事前予約不要）
11.3（日）12:00〜12:30／13:30〜14:00 趙三川
11.9（土）12:00〜12:30／13:30〜14:00 平野由衣
12.8（日）11:00〜11:30／12:30〜13:00 山司恵莉子
12.22（日）13:00〜13:45 三原麻里、閏間健太（トランペット）★クリスマス・スペシャル

演劇・美術のイチオシ企画！

ACM劇場

◆ACMファミリーシアター
「リトルセブンの冒険　〜白雪姫去りし後の“こびとたち”の物語〜」
11.16(土)13:00〜、17(日)11:00〜／15:00〜
23(土) 11:00〜／15:00〜、24(日)13:00〜
作：中島かずき　脚色・演出：中屋敷法仁
出演：七味まゆ味、加藤ひろたか、齋藤明里、蓮井佑麻、佐々木穂高、田中 廉、よし乃、川﨑賢一、大内真智、小林祐介、塩谷 亮
※詳しくは当館HP（ACM劇場）をご覧ください。



現代美術ギャラリー

◆田村友一郎　ATM
11.2（土）〜2025.1.26（日）
［休館日］月曜日（祝日の場合は翌火曜日）、年末年始
［開場時間］10:00〜18:00（入場は17:30まで）



［入場料］一般¥900／団体（20名以上）¥700
高校生以下・70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

★MCOセミナー受講団体募集！
水戸室内管弦楽団のメンバーが講師を務める2種類のレッスンにつきまして受講団体を募集します。詳しくは、当館ウェブサイトをご覧ください。
■管楽器アンサンブル（三〜八重奏）レッスンとコンサート
事前レッスン（非公開）：2025年1月11・12・13日（土・日・月祝）から計5時間程度
コンサートリハーサル：2月15日（土）　コンサート本番：2月16日（日）　定員：4組
■吹奏楽／オーケストラ公開レッスン
事前レッスン（非公開）：2025年1月18日（土）、リハーサルと公開レッスン：1月19日（日）　定員：1組
申し込み締切：いずれも10月4日（金・必着）　お問合せ：水戸芸術館音楽部門「MCOセミナー」係

2024年10月8日発行（第266号）
編集：水戸芸術館音楽部門 ｜ 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、只木結乃
発行：（公財）水戸市芸術振興財団　〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8　Tel.029-227-8118（音楽部門）
Tel.029-231-8000（チケット予約センター 9:30〜18:00・月曜休館）　https://www.arttowermito.or.jp/
デザイン：K5 ART DESIGN OFFICE.　印刷製本：山三印刷株式会社

■編集後記

入職まもない5月のMCO定演の思い出。“Hello”と挨拶をくださったアルゲリッチさんに、乾ききった口をパクパクさせ、やっとの思いで「は、は↑ろぉぅ……」とひねり出してから、半年が経った。今号が皆様のお手元に届く頃、ブルネロ氏にはスマートに“Hello”と言えていますように。（角）

11/2に水戸市立見和図書館での音楽鑑賞講座を担当させていただきます。テーマはベートーヴェンの《第九》。今年は《第九》作曲・初演から200年、日本人による日本初演から100年という記念の年なのです。参加申込は10/19から見和図書館へ。（篠）

先月から300人の第九のコーラス練習がスタート。参加している方に街で声をかけられることもありますが、お顔とお名前が一致せず申し訳なく思っています。でもお互いに笑顔で挨拶を交わせるのは嬉しいものですね。じゃあ、また次の練習で！（て）

親友と、富士急ハイランドに行く予定だったのに、雨のため急遽予定変更。渋滞と首都高速道路に苦戦し（見事に道間違えました）、やっとの思いで友達の家に！久しぶりに昼からお酒を飲んで、語って。友達は大切だなあとしみじみ…（春）

秋が深まるとふと思い出す東雲という言葉。やわらかな響きが好きで、文章にこの言葉が出てくると穏やかな気持ちになる。寒さで起きることが増えるこの頃。温まっていたい気持ちを布団に置き、夜明けの空をみる日を増やしたいと思っています。（只）

前回のvivoを読んだ母から、「水戸っ子」ではなく「水戸っぽ」だ！とツッコミが入りました…訂正させていただきます。MCO第114回定期演奏会に向けて半年ほど携わってきましたが、ついに待ち焦がれていた音楽をお届けする時が訪れます。（根）

水戸市内の小中学生の皆さんに、吹奏楽や合唱などの音楽活動の成果を披露して頂く「市内小中学校芸術館コンサート」。例年、楽屋もバックステージもすし詰め状態になってしまう為、コロナ禍の2020年以降は見送りとなったが、12月に再開する。ようやくの全事業の復活だ。（中）